

スツタニパータ

— 第五、彼岸に至る道の章を考える(二) —

原 豊 寿

四、学生ブンナカの質問

ブンナカは尋ねる。「多くの人々は何故、この世で盛んに神に供儀を行うのか。」と。仏陀はこれに対し「多くの人々は我らの現在のこのような生存状態を希望して、老衰にこだわっているからだ。」と答える。

仏陀は、煩惱に翻弄されながらも人間はそのような生存を希望しているといふのである。そして、老衰による死を恐れ、こだわっていると言うのである。だから、神の加護を求めて、供儀を行うと、言っているのである。仏陀の不思議なところは、「だから止めよ。」とは言わない。そう言うものだと言っただけである。このような仏陀の態度に、仏教の基本的な立場があるように思える。すなわち、現実世界を否定し去るのではなく、もしその世界の苦惱(生と死)から自らが救われたいと希望するのなら、これこれのことを目指し修行しなさいといっているのである。これこれとは、「世界の現在の状態を究め、明らめ、動揺することなく、安らぎに達し、悪い行いをせず、苦惱なく、望むこともない人。」のことである。

仏教はインド以外の国に伝播するときに、大きな戦争を経験したことがないといわれるが、このような仏陀の現実容認の態度（ただし積極的容認ではない）に、その遠因があるように思われる。それを苦悩する現実への慈悲の態度であると言って良いであろう。

五、学生メッタグーの質問

ここではメッタグーは、先のブンナカと同じように苦の生起するものについて質問する。仏陀はそれは執著であると答える。メッタグーは、ではその執著を離れる方法は？と仏陀に尋ねる。仏陀は、今眼のあたりに体得される理法を解き明かそうと言う。

この体得される真理については、ここでは具体的には出てこないが、ダンマパダ第二十章 道 で示される四諦八正道をさしていると思われる。ここでは仏陀は、真理を見る働きを清めるためには、このほかに道はないといている。

四諦のうち、第一の「諦」は苦諦である。仏教は、この世界は苦であるという認識を持つことに始まる。世界は苦であるという認識を持つに到る現実の事象には、事欠かない。「生」においては、虐待、心身障害、差別など。「老」においては、孤独、痴呆、介護、年金など。「病」については癌、精神病、エイズ、などなど。「死」については自殺、孤独死、交通事故死。そのどれをとっても大きな問題である。しかし、伝統仏教はこれらのどの問題に対してもアプローチが遅れている現状である。仏教は元々そういう問題に対して、アプローチしていく体質を持っていないという論があるが、自分自身は都合のよいところで現代化しておいて、困難な問題は回避するというのはいかがなものかと考えざるを得ない。少なくとも、それら苦の生起する原因を仏陀の言うところの

「知」として、追求する態度ぐらひは、「苦諦」の次の門である「集諦」を極める上でも必要であると思う。それらの作業を進めた上で、「滅」と「道」という現実的実践への方途が、議論できよう。

仏陀は同じこの章の中、一〇五五で言っている。「そなたが気づいてよく知っているものは何であろうと、それらに対する喜びと偏執と識別とを除き去って、変化する生存状態のうちにとどまるな。」と。この「そなたが気づいてよく知っているもの」を我々の知っている、あるいは信仰している仏教とすると、我々はそれに喜び、偏執し、識別（宗派）して、変化している生存状態のうちにとどまって、仏教化を行っているという、空恐ろしい矛盾に直面していることになる。このような反省は、維摩経に見えるところである。我々教師はどうしても現実を見ると、仏陀の言葉や、祖師の言葉と照らし合わせて考える癖を持っている。凡人は、けだしそうあるもので、そのような仕方では仏陀に近づけるものではないのかもしれないが、仏陀自身は「汝の眼で物事を見よ。」と言っていることは、またそれを修業と言っていることとは忘れてはならないところである。

六、学生ドータカの質問

ここでのドータカの質問は「最上のやすらぎとは何か。」ということである。仏陀はメッタグーに答えた同じく「そなたが気づいてよく知っているものは何であろうと、執著してはならない。」と答える。

では最上とは何か？ スッタニパータ第四 五、最上についての八つの詩句を見てみよう。ここで仏陀は「修行者は見たこと、学んだこと、思索したこと、または戒律や道徳にこだわってはならない。」と知っている。そのようにして得られた境地は、いずれは極端に走り、偏見になるといのである。この言葉などはイスラム教などと比較してみると、仏教の特質をよく表していると思われる。イスラム教では神との間に交わした契約としての

「戒律」を、従順に守ることを最上のこととし、信仰の中心にしている。その従順さは時に現実を超えることは原理主義の人々を見ればよくわかる。戒律は仏教でも大事なことだが、仏陀はそれを守ることが最上ではないと言っているのである。ただ、この「最上についての八つの詩句」の最後に八〇三でこう言っている。「このような人は、彼岸に達して、もはや還ってこない。」と。仏教におけるこの彼岸に至る境地はニルヴァーナと呼ばれてきたが、具体的にどのような境地なのかは多く語られることは無いように思う。それは多分、言葉による認識が不可能な境地だからであろうし、だからこそ幾万の修行者たちが、言葉による認識を捨て、修行に励んだのであろう。

仏陀自身、この章一〇六六で、「眼のあたりに体得されるこのやすらぎ……。」と言っているように、仏教で言うところの最上の境地には自分で行くしか方法はないと、仏陀は言っている。

七、学生ウパシーヴァの質問

ここではこの章の最後一〇七六について考えよう。

仏陀は、

「ウパシーヴァよ。滅びてしまった者には、それを測る基準が存在しない。彼を、ああだこうだと論ずるよすがが、彼には存在しない。あらゆることながらがすっかり絶やされたとき、あらゆる論議の道はすっかり絶えてしまったのである。」という。これは、大乘で言う如来の境地を言っていると思われる。如来は如去とも言われるが、滅びてしまった者とはこの苦界をまさに去った者であり、我々衆生との接点がない。そこで大乘は、この章一〇七と一〇七二で言うところの「最上の（想いからの解脱）において解脱した人」即ち如来ではなく、最上の想

いに止まる人として菩薩を設定し、「想い」を誓願（本願）としたように思うのである。そして、その人を道標として、彼岸にいたる道を語ってきたように思う。

我々日本仏教は死者を仏と呼び習わしてきたが、「最上の〈想いからの解脱〉において解脱した人」になるとは現実的には死者にしか不可能なことに思われ、その死者を仏と呼び習わしてきたことと結びつくように感じられる。飛躍であろうか？

八、学生ナンダの質問

この章はどのようなものを聖者と呼ぶのかについて、応答がなされる。仏陀は伝承的学問、哲学、知識のいずれによっても聖者と呼ぶことはないという。そして、「道の人バラモンがそれらを捨て去ったならば「煩惱の激流」を乗り越えた人々である」と説くという。この応答はウパシーバと同じような展開であるが、仏陀の言う「知」が学問的なものではないこと、したがって知的なレヴェルで得られるような「知」でないことは窺い知れる。また、ここでも「すべてを捨てる。」ことを強調することから、四無量心の「捨」を仏陀が重要視していたことがわかる。

親を捨て、子を捨て出家した仏陀の修行の基本的スタンスであるが、江戸期儒学者によって、仏教が批判されるときに、そのことが大きな攻撃点であった。弘法大師も「三教指帰」の中で、仏教と儒教の相違点について論及しているが、儒教が世俗的人間関係を形成する上での宗教であるのに対し、仏教がいわば個人と宇宙との関係性に重点をおいた宗教であることは、教化の場では認識しておかねばならないことであろう。儒教的教えも我々日本人には根強く浸透しているところであり、ともすると仏教布教の現場でも儒教的考えに基づいた布教が無意

識に行われることは、多々あるからである。

九、学生カッパから学生ビンギヤの質問まで

これよりは同じような質疑応答が繰り返されるので気づいた点に絞って、述べることにする。

学生カッパの質問では再び、老衰語られる。スッタニパータ第四の六「老い」では仏陀は、自分でさえ常住ではないのに、人は無常なる財とか名に執著し、憂いと悲しみと物惜しみを捨てることができないと説く。

学生バドラーヴダの質問は面白い。バドラーヴダは仏陀の言葉を聞いて、人々はこのから立ち去るでしょうと言うのである。これに対し、仏陀は、死の領域に愛著を感じている人々には私の教えは聞くことは出来ないと言う。

菩提樹下で悟りを開いたときにこれを他に伝えるか否かについて悩む仏陀の姿が思い出されて、興味深いのである。「縁なき衆生」については、阿含経に登場するウパカとの対話もまた似たような話ではある。現実のブツダが布教について、そういう人々の存在をどのように考えていたのか。教化に携われれば必ず、直面する問題だけに、仏陀の態度に学ぶところは多い。

学生ジャトウカンニンの質問では「出離」について語られる。世間と出世間という言葉は仏教ではよく登場してくる言葉であるが、観念として理解することはそう困難ではないように思われるこの言葉も、現代の現実にもそのような隔たりのある場が、出家者にあるや否や疑わしい。我々はよく「世間では・・・」という言葉を使うが、この言葉の裏には自分が出世間のものであるという意識が見え隠れしており、そこにはあらかじめ虚妄があると
言わざるを得ない。反省点の一つである。

学生ウダヤの質問では、ウダヤは世の人は何によって束縛されるのかと尋ね、仏陀はそれは歓喜であると説き、真のバラモンは外面的にも感覺的感受を喜ばないと説く。しかし、歓喜なき人生など考えられないのではないだろうか。感覺的感受を喜ばなくなれば、それは死を意味してはいないだろうか。このように考えたとき、歓喜にも感覺的感受にも必ず永遠には続かないという無常の道理が意識される。仏陀は、スッタニパータ第一の二「ダニヤ」でもそうであったが、人間の刹那、刹那の感情の動きに潜む危うさを、常に指摘し続けるのである。

学生ポーサラの質問では、仏陀は、如来はすべての識別作用の住するありさまを知り尽くし、如来自身の存在する有様を知っていると言う。さらに、安立したバラモンは、無所有の成立する基を知って、ありのままに知る智が存すると言う。

如実知自心とはこのことをさしていると思われるが、無所有の成立する要因、即ち無常の真理（ダルマ）を知ることがそれに達する上で必要であるといっているのである。

学生モーガラージャの質問には「空」の觀念が登場してくる。仏陀は、この世界を空と感ぜよ。さすれば死を乗り越えられるというのである。空について詳細に語る力量を持たないが、その言葉の前にある「自我に固執する見解を打ち破れ」にヒントがありそうである。即ち、死とはまさに主観の問題であり、死は客観的には他人の死は観察できても、自ら経験できるものではない。であれば、それに固執して、どうのこうのと悩むことは無駄である。それは自分の生まれについて悔やむことができないことと同じである。生はすでに始まり生きつつあるという変化の中でしか把握できないし、終わりとしての死は経験不可能である。このようにものに実体はないということが「空」ということかもしれない。

学生ビンギヤでは、ビンギヤは自分が年をとったので、迷いなく死ぬ方法を教えてくれと仏陀に請う。仏陀は、

不思議な答えをする。「物質的形態を棄てて、再び生存状態に戻らないようにせよ。」と言うのである。後者の答えは、輪廻からの解脱と、それに関わる性的行為を回避せよで理解できるが、前者の「物質的形態を棄てて」は、まるで死ねと言っているように受け取れる。多分、仏陀はそこまで言っているのであるが、これまでの十六学生との問答を見渡した結果としては「物質的形態をもつ（生きている）今こそ、再び生存状態に戻らないための努力をせよ。」と理解した方が適切に感じられる。

十、まとめ

スッタニパータ第五「彼岸に至る道の章」をテキストに、仏陀観について述べてきたが、これまで多くの先覚者によって述べられてきたことを復唱するような拙論になって申し訳がないようである。

しかし、こうしてこの最古層に属する仏典を見るとき、仏教者としての自分の今日ある姿を、仏陀の時代と比較してみると、その大きな相違点に愕然とする。そこには二千五百年という歳月と、変容というだけでは言い尽くせない、形骸のみを残しているとしか言いようの無い自己の現実を見る思いがする。実際、本論中にも述べたが、たった一人の友人さえ救えない、その遺骸に手を合わせるだけの、仏教徒としての形を残しただけの自らが、教化を標榜することなど本当に羞恥の至りである。それでも仏陀の言葉を現代に伝承する努力は継続していると思う。なぜなら、この論を進めるうちにも感じたことであるが、仏陀の言葉には現代人を導くに十分な力がいまだあるように思えるからである。

以上

参考文献

- 「ブッダのことは」中村 元訳 岩波書店
「ブッダの真理のことは・感興のことは」中村 元訳 岩波書店
「法句経講話」友松円諦著 講談社
「ブッダ入門」中村 元著 春秋社
「原始仏典を読む」中村 元著 岩波書店
「原始仏教の実践と展開」早島鏡正著 世界聖典協会
「初期仏教の悟り」早島鏡正著 世界聖典協会

〈キーワード〉入門、仏典、成仏

